
The End a Case—最後の事件

kuroda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The End a Case―最後の事件

【Nコード】

N4041H

【作者名】

kuroda

【あらすじ】

《仮》『キールを消せ』ここから全てが始まった。あの方からの連絡で黒の組織が動き出した。水無怜奈をかくまっていたFBIも動き出した。CIAとなって帰って来た本堂瑛助。そんな中、組織の新しい仲間偶然遭遇したコナン。その人物はアイリッシュと深く関わっていて、江戸川コナンの正体を知っていた…混乱の中、キッドとの接触。多くの人を巻き込んだ壮絶ない殺人事件…今、過去にない最大のバトルミステリーが始まろうとしている。

File 1 始動

『ザアアア』

昼間の上空を黒い雲が覆う…強く降り注ぐ雨が漆黒に包まれた1台の車を打つ…車内からは、電話で話す声が聞こえた。

「オレだ…、たった今あの方からの連絡が入った…『赤井とキールを抹消しろ』とな…」

「あ、赤井！？アイツはキールに撃たれて死んだはずだろ！？」

「フン、まあいい例え仏さんが生きてたら…もう一度殺せばいいだけの話さ…」

「コンドハ…オレウツ…」

電話の向こうからは、甲高い声の女と、カタコトで喋る男の声がした。

「詳細は後ほど連絡する…」

ジンは電話を切ると、笑みを浮かべ、脳裏には赤井秀一と、キールの姿が浮かんだ…

「ジ ジンの兄貴？」

ウオツカがそう聞くと、

「フン…、面白い拝んでやるかその仏さんを…」

全てを飲み込むようなこの雨はいつこうに止みそうにない…

―同時刻

帝丹小学校、1年B組では、
窓から外を見ながらため息をつく生徒達がいた。

「雨…止みませんね」

「これじゃあ、5時間目のクラス活動のレクは出来ないね…」

「くそー！ついさっきまでピーカンだったのによー」

光彦、歩美、元太達3人は外を見ながら深くため息をついた…
すると教室のドアが開き、小林先生が入って来た。

「はーいじゃあ皆座って、この雨でレクは出来ないけど代わりに
先生から宿題を出しまーす。」

『ええー！』

小林先生はニツコリして言ったが子供達は不満顔だ。

「そんな顔しない！宿題は宿題でも私からの暗号よ」（ハッ、でた
よあの乱歩マニア…）

コナンは肘を付けながらあきれた顔で小林先生を見ていた。

その一方、それを聞いた元太、歩美、光彦は大喜び。

「えっ、暗号ですか！？」

「おっしやあ！今日こそコナンより早く解いてやる！」

「先生ー早く配ってー！」

歩美が先生を急かすと、ようやく暗号のプリントを配り始めた。

「×切は明後日の月曜日まで、期限までに解けた人にはプレゼント
を上げます。」

「おっしやあー皆頑張るぜー」
『おー！！』

元太を中心に暗号解きが始まった。

File 2 懐かしき思い出

「うーん、小林先生にしてはなかなか難しいですね」

「でも何だろねプレゼントって？」

「うな重じゃねえか!？」

元太、歩美、光彦、コナン、灰原達少年探偵団は下校途中で近所の本屋に寄り道をしていた。コナンの足は自然とミステリー系の本棚へと向かっていた。

（あつたあつた♪発売が待ち遠しかったんだよねあ、新名香保里の新作ミステリー『後継者の軌跡』）

本をとってレジに向かうとしたら背後から聞き慣れた声がした。

「あれ、コナン君じゃない」

「ら、蘭姉ちゃん!？学校はどうしたの？」

「今日は、テストがあつて午前中で終わったのよ」

蘭がそう説明すると蘭の後ろから園子が口を挟んできた。

「まあこんなガキンちょに高校のテストの大変さなんてわからないわよ」

「ハハハ…」

（オメーの大変は、どーせ数学だろ…）

コナンは苦笑いだが内心、

園子をバカにしていた…

「そ、それで蘭姉ちゃん達は何を買いに来たの？」

「あつ、私じゃなくて園子がね…」

「仕方ないわね、超特別にガキンちょ達にも見せてあげるわよ」

達？と思いコナンが後ろを向くと、元太達が後ろに立っていた。

「なんだなんだ？特別なものって？もしかしてうな重の本か！？」

元太の言葉に一同が『ガクッ』となった。

（オメー、頭ん中うなぎだらけだな…）

「違うわよ！これよ、これ。」

『京極真 世界に挑む』真すわんの歴史に残る1冊よ」

（す、すわんって…）

コナンは少なからず引いていた…すると、蘭が意外な言葉を発した。

「でもなんかこうしてると、瑛佑君のいたことを思い出すね。」

少しの沈黙が続いた

「あ、ごめんね…なんか暗い雰囲気にしちゃって」

「だいじょーぶよ！あの子なら元気にやってるって」

園子が蘭を励ませた。それを聞きコナンは懐かしそうな顔で、

（ああ、大丈夫さ、きつとあいつなら…）

「あら？随分自慢げな顔じゃない」

「あ、ああ俺思っただよな、あいつすごくなって帰ってくるんじゃないか…てな」

コナンは灰原に言われたように自慢げな顔だった…
そしてコナン達は本屋を立ち去った…

File 3 悪夢

・その夜

(ゝゝ)

コナンは買って来た本を読み進めていた。
そんな時、

『ブーブー』

枕元に置いた携帯が鳴った。

(誰だ?こんな時間に、それに新一宛なんて…)

すでに時間は、夜中の12時を回っていた…

コナンは画面を見ると、

(非通知…?)

「はい、工藤新一です…」

「おお、新一か久しぶりだな。」

その声の主はとても懐かしかった。

「父さん!?バ、バーローこっちは今真夜中だぞ!」

「ハハハ 悪い悪い、いや、なにちょうど今日日本に向かっていると
ころだ。」 「こ、こっちに!?!」

「ああ、ちよつとした仕事絡みでな、明日の9時頃には、着くと思
う。それじゃ」

「あ お、おい！」

優作の突然な電話と知らせにコナンは驚いた。

（たくつ、昔から父さんはやる事が急すぎんだよ！！）
（しゃーねえ博士に頼んで迎えにでも行つてやつか…）

そう考え、阿笠邸へ電波した…

翌日…

「ごちそうさまでした！蘭姉ちゃんちよつと博士ん家行つて来るね」
「えっ、こんな早くから？博士に迷惑かけないようにね」
「うん！」

朝食を食べ終えコナンは、博士の家に向かった。

『臨時ニュースです。今日8時30分頃、羽田便B736Jが原因不明の事故で滑走路に墜落しました。
乗客者数は未だに不明です。繰り返し…』

朝食を食べていた小五郎と蘭は、

「こりゃー、とんでもない事が起こつたな…」

この時蘭は胸がざわざわしていた…

（……………）

この悪夢のようなニュースをコナンはまだ知らなかった…

博士邸 -

「博士ー、父さん達迎えに行くから羽田まで連れてって……」

コナンがそう言い掛けたところで、

「し、新一君、こっちへ来るんじゃ、」

博士の声はTVの方から聞こえた。

そこでコナンは悪夢を見ているかのような光景を目の当たりにした。

『臨時ニュースです。今日8時30分頃、羽田便B736Jが原因不明の事故で滑走路に墜落しました。乗客者数は未だに不明です。繰り返し……』

言葉を失った…

「は…はは、嘘だろ…父さんと母さんは…？」

コナンの声は震えていた…ポケットから携帯を取り出し父親の元へ、電話した…

『プープー…』

耳には、悲しい音が聞こえた…

File 4 奇跡

「と、とにかく空港まで行くぞ新一!!」

「あ…ああ…」

明らかに動揺しているコナンを見て博士も戸惑っていた。

(新一…)

コナンと博士そして哀も、ビートルに乗り羽田へ向かった

『……………』

コナンと博士は、現場を目の当たりにし、言葉を失った…
燃え上がった炎はどす黒かった。

(……こんなになったら、もう父さん達も…)

コナンがそんな事を思った時、ふと、

TVの音が耳に入った…

『えー、先ほどの飛行機墜落事故ですが新しい情報が入って来ました。奇跡でしょうか!? 重・軽傷者はいるものの、なんと死者はいません!! 繰り返し…』

コナンの思った事をくつがえすかのような、最高の吉報が聞こえた。後を引き、空港の従業員が公衆電話を持ちながら、誰かに呼び掛け

ていた…

「江戸川コナン様、江戸川コナン様いらっしゃいますか？工藤優作様からお電話が入っております！」混乱の中、今にもかき消されそうな声も、しっかりとコナンに届いていた。

コナンは従業員に駆け寄り電話を受け取った。

「父さん！？父さんか！？」

「すまなかったな新一…心配かけて、…安心しろ有希子も無事だ。」
「バ、バーロー…心配かけんじゃねーよ」

コナンにとって、穏やかな時間が流れていった…

（よかったのお、新一…）博士は、一安心していた。

「よかったわね、江戸川君…」

哀はコナンを見ながら言ったがふとこんな事を考えた…

（確か前にもこれに似た事件があったような…）

「ん？どうかしたかね哀くん？」

「え！？いえ、なんでもないわ…」

博士は少し哀の様子がおかしいのが気になった…

File 5 家族

空港では、コナンと優作の電話を通じての会話が続けていた…

「新一、今からお見舞いにでも来ないか？面白いものが見れるぞ…」
「しゃーねえ、行ってやるよ…世界屈指の小説家と伝説の女優さんをな…」

病院にて・

「ここか…」
『コンコン…』

返事が無い…

（あれ、おかしいな…ここであってるはずなんだけどな…）

コナンは事前に電話で部屋番号を聞いていてそれを頼りにして来た…

コナンは一樣確かめる事にした。

「……入るぞ…」

ドアの取っ手を取り
『ガラガラ…』

「よお、工藤！」

「服、服部…な…な、な、なんでオメーがここに居んだよ!？」

そこには、思いもしない顔があつた…

ケガを額に負っていたもののいつもの元気はあつた。

「なんや工藤、お前のオトンとオカンの見舞いに来てやつとんのにその反応はあ…」

「んなこん聞いてんじゃねえ！なんでオメーが東京に居んのか聞いてんだよ！」

コナンの声が開け放したドアから廊下に響いた…

服部は口元で『シーシー』と、表現した。

とにかく、服部はドアを閉め、コナンを奥の方へ連れてつた…

「おお、新一待っていたぞ！」

「久しぶりね、新ちゃん！」

そこには、父と母がいた。優作は顔と腕を火傷してるくらいだったが、有希子は火傷は大したないものの、左腕を飛行機の部品にやられ、骨を折っていた…

全治約2ヶ月はかかるという…

「ごめんね、新ちゃん…心配かけて…」

有希子の顔には、明らかに元気がなかった…

「いや…父さんと母さんが無事なだけでも十分安心だよ…」

普段は見せる事のないコナンの顔を見た服部は少し口元が笑つた…

File 6 手紙

「んで、なんだよ父さん…面白いものって?」

コナンは電話で言っていた『面白いもの』がずっと気になっていた。

「ん?なんだもう会ったじゃないか…」

「はあ?、会った?」

「いや、面白い人と言つべきかな…」

「なんや工藤、わからへんのか?俺や、俺」

「はあ?」とコナンは服部を見ながら目が点になった…

「ほら、彼は大阪人だろ?…」

「だろって、それだけかよ!」

「なんやと工藤!じゃーお前おもしろいこと言ってみー!」
『ギャーギャー』

コナンと服部が言い合っていると…

「コラー、あなた達病院なんだから静かにしなさい!」

この一声で2人の動きは、止まった…

2人はお互いに見合い、

そっぽを向いた…

これを見た優作と有希子は苦笑いだった…

―病院入口

コナンと服部は『ぼ〜』と歩きながら話していた。

「んで、正直なんでこっちきたんだよ…」

「理由はこの変な手紙のせいや…」

そう言いながら服部は一枚の封筒を出した。
その封筒を見ながら中を見ると、手紙には、『工藤新一様』と書いてあった。

「…封筒の方には『服部平次』書いてあって、中には、『工藤新一』
やおかしいと思うやる…」

「またかよ…」

コナンが『またかよ…』と言うのは解らなくない、以前、美國島の人魚事件の時にも同じような事があったのだ…

そう思いながらコナンは手紙の内容に目を通した。

《47の鳥が落ちる時、消えるものは無い… 日本の回路沈む時、
逃げる道は閉ざされる… 赤き塔が闇に染まる時、光は闇に飲み込まれる…》

コナンと服部は手紙を読み沈黙した…

「差出人不明で、切手も無し…それになんなんだ、この文章の後の空白は？」

「ああ、そこは俺も引つ掛かるところや…なあ工藤、俺が思っにも
うこれは始まつてるんとちゃうか？この『47の鳥』って…」

服部が言おうとしたと同時に、コナンも…

『飛行機！！』

「47つつうのは、鉄の原子番号で…」

「んでもって、鉄の鳥ちゅったら飛行機しかあらへん…」

この手紙が、

2人の頭脳の歯車を動かし始めた…

File 6 手紙（後書き）

久しぶりに書きます。

読んでくれる人はいるのかな？

どうでしたか？

今回は少し長め。

File 7 緊張と喚声

2人は手紙とのにらめっこを続けていた…

「あゝもう全っ然わからへん！！工藤なんかわかったか？」

「いや、『日本の回路』つうのは、まだわかんねーけど、『赤き塔』
つてのは、東都タワーのことだろーぜ…」

『……………』

そう2人が話していると、腹が物欲しそうに鳴った…

『グウウウウ』

「しゃーない、ちょうどお昼やし、飯でも食おか？腹が減っては戦
がでけへんしな！」

「そんじゃあ最近この近くにうどん屋が出来ただけどそこ行っ
てみるか？」

—うどん屋にて

『ガラガララ』

「へい、らっしやい！！」

2人が入口を開けたとたん店内から大きな声がした…カウンターに
座りメニユーの中から選んだ。

「んじゃあ俺は普通のうどんにすつか…」

「ほな、俺もそれにしよか、おっちゃん！普通のうどん2つ頼む

「でえー!!」

大阪では、普通の大きさの声も東京の店だと良く響いた…

服部の声を聞き、店内にいたお客さんが静まり返った…

すると、耳元でコナンが赤ら顔で言った。

「バ、バ一口…声がでかすぎんだよ…」

「なんや工藤、大阪じゃあ物頼む時はいつもこんぐらいやで?」

「……………」

しかし、服部の声を聞き、テンションが上がった店長が話し掛けてきた…

「お、兄ちゃん威勢がいいね! よーし気に入った存分に腕奮っちゃおう!」

「おーきにおっちゃん!」

—5分後

「へいお待ち!」

店長が腕を奮ったうどんは普段より多めに盛ってあった…（もちろんコナンのも…）

しかし、うどんを見て服部は静止していた…

「おっちゃんこれ作り方間違ってるんとちゃうか? こんな色の濃いうどんがあるか? ちゅーねん!」

『……………』

またしても店内が静まり返った…

「なんだい兄ちゃん？もしかしてコッチのうどん食べるの初めてか？」

「ああ、そうやけど…」

「そうか！じゃあ早く食ってみなつて、見た目ほど味は濃くないから！」

そう言いながら店長はウインクをした。

「……………」

「いいから食ってみろつて服部…」

「ほな…」

『ズルルルル』

店内に緊張が走る…

「ど、どうだい兄ちゃん？」

「…う、うつまー！なんやこれ超うまいやんけ！？」

『うおおおお！ヒューヒューいいね兄ちゃん！！』

店内が喚声に包まれた…

File 7 緊張と喚声（後書き）

今回はかなり、ほのぼのとしました。でもまあ、それなりに書きながら楽しめました。今日、評価・感想をみたら、一通ありました。ワクワクしながら読んでみたら、間違いの修正でした← で
も読んでくれる人がいたって事かな？嬉しかったです。

File 8 ハンカチ

『ガララララ』

「ほな、おっちゃんありがとな」

「おう！兄ちゃんまた来なよ！」

2人はうどん屋を後にした…

するとさっそく服部は話し始めた…

「ほな工藤、俺は病院に戻るで…和葉の事も気になるし…」

「ん…なんだ？彼女も来てんのか？」

コナンは心配ぎみで服部の顔を見た…

「そないな心配せんでええて！ちよつと事故のショックで氣い失つてるだけや！」

「ならいいけど…なんなら蘭に言つとこうか？」

「ええて…あの姉ちゃんに心配かけとうないし…」

すると、本屋の時と同じように後ろから声がした…

「あれ？コナン君じゃない？それに服部君も、2人してどうしたの？」

2人は『ビクッ！！』とした…

「ら、蘭姉ちゃんこそどうしたの？」

「私はお母さんの所に行つててその帰り、それより服部君頭どうし

たの？」

蘭は服部の額が気になり聞いた…

「あ…ああ、これか！いや、ちょっと転けもーて…」
そんな事を言ってる服部を見てコナンが…

（オメー嘘下手だな…）

すると蘭が何かに気付いた…

「…？服部君…そのポケットに入ってるハンカチって…」

蘭はそのハンカチに見覚えがあつた…

――一週間前

蘭達が夕食をとりながらTVを見ているとニュース番組で…

『来週、世界初二階建の飛行機が離陸します。その記念に乗客にB736J限定のハンカチを配布するようです…また…』

この時にハンカチを見ていた…

「あつ…ああこれか？いや、これは何ていうんやろ…その…」
「和葉ちゃんは…？」

服部は

「えっ？」と言った…、蘭はこのハンカチについてもう1つ知っていた…

「『えっ？』じゃないわよ！そのデザインのハンカチはね！？ペアで来た人にしか配らないやつなのよ！？」

蘭の言った事を聞いてコナンもふと思い出した…

（そーいやー、父さんのポケットにもあのデザインのハンカチあったな…）

蘭は服部に和葉の事をもう一回聞いた…

仕方なく服部は和葉の容体といきさつを話した…

すると蘭は今まで啖呵をきっていたのにその話しを聞き目が潤んできた…

「和葉ちゃん……」

File 8 ハンカチ（後書き）

少しお久しぶりです！ 最近この小説に映画みたいなタイトルが欲しいなと思います。そこで何かいい案があつたら教えて下さい。

それでは評

価・感想をお願いします！

File 9 見舞い

『タツタツタツ…』

走る音…

『ガラガラ』

扉の開く音…

その音の主は蘭達三人だった。

蘭は和葉が寝ているベッドへ近づいて行った…

「和葉ちゃん……」

弱々しい今にも泣き出しそうな声で和葉に呼び掛けた…

その時だった…

「…ん……んん…」

和葉が意識を取り戻したのである。それに気付いた服部は走って医師のもとへ向かった…

「和葉ちゃん!!」

「…蘭…ちゃん…?」

和葉は少しずつ意識がはつきりしてきた。ちょうど服部が医師を連れて来た。

医師は和葉に異常がないか簡単な検査をしてそれが終わると部屋を

出ていった…

「ここは…？」

和葉がそう聞くと服部が応えた。

「安心せえ、病院や…」

「病院…？なんでうち…病院にいるんや？確か東京行きの飛行機に乗ってえ…それで…」

どうやらそこから先は思い出せないようだ…

まあ思い出さなくて正解なのだか…

「無理に思い出さんくてええ…今はしっかり休んで、早よ元気になれや…」

「平次…」

「和葉姉ちゃん早く元気になってね！」

「ありがとなコナン君…」

「ホント…ホント無事でよかった。」

蘭は涙を拭いながら和葉の手を握った…

「ごめんな蘭ちゃん…心配かけて…」

和葉はおしとやかな目で言った…

するとコナンと服部は二人に声をかけていくと、病室を出ていった…

「んで…これからオメーどうすんだ…？」

「そやな、和葉は入院するからええけど、俺はあてあらへんしな…」

服部はそう言いながらチラッとコナンの方を見た…

それに気付いたコナンは…

「わあたよ…泊めてやるよ!」

と、言った…

「すまんなあ工藤!」

「え!?工藤?」

ちょうど蘭が病室から出てきていた…

服部は慌てて自分の言葉をフォローした…

「く…くらつや、くらつ!和葉の事が心にくらつてなあ…」
「ふん…」

(相変わらずオメーこういうのは上手だな…)

毎回の事だがその度に服部は疲れている…

File 9 見舞い（後書き）

なんと！？今まであつた評価が全部なくなつてしまいました（泣）

なんででしょう？ また、

評価お願いします。

File 10 ポアロ…

服部は蘭の問にあたふたしていたが、そこでコナンが服部をフォロ―するかのようになり、

「と、ところで蘭姉ちゃん、今日平次兄ちゃんを小五郎のおじさんの家に泊まらせてあげてもいい？」

「え？別にいいわよ…」

「サンキューな姉ちゃん」

服部はさぞ嬉しそうに喜んだ。

（ハン…さてはオメー泊めて貰えるつもりで来たな…）

（あ、バレてもーた？）

―毛利宅

「姉ちゃんおかわりー！」

「はい」

コナン達は服部を含んで食卓を囲んでいた。

すると、茶碗を片手に持ってドンドン食べる服部を見て、小五郎が、

「それにしても、オマエよく食うな」

「コナン君もこれぐらい食べなきゃ大きくなれないよ」

「そやぞお、坊主…（笑）」

「う、うん…！」

（ハハハ…、どーせこの体じゃいずれ言われると思ってたよ…）
《グリッ！》
「！？！？」

コナンは正座していた足で服部のあぐらをしている足を踏み潰した…

「服部君どうしたの？」
「い、いやこのぼお…」
《グリッ！》
「！！！」

「服部君？」
（こ、こおんの坊主…）

服部は横目でコナンを見るがコナンは何事もなかったかのようにパクパクとご飯を食べ進めていた…
その瞬間だった…

《ピピ…》
《ドオツゴオオオン！！》
探偵事務所は大きく揺れた…
服部達は急いで表へ出ると、探偵事務所の隣のポアロの店が大きく吹き飛んでいた…

『なっ！？』

コナンと服部は息を飲んだ…

File 10 ポアロ…（後書き）

ども、久しぶりです！ 最近夏休みの宿題でなかなか更新が出来ませんでした。やっぱり宿題は早めに終わらせた方がいいですね。
では、評価・感想お願いします♪

File 11 工藤新一登場？（前書き）

今回からあらすじを書きたいと思います。

—— 前回のあらすじ —— 平穩に夕食を食べていたコナン達。しかし、突然の大きな揺れと爆発音… あわてて表へ出ると、無惨にも吹き抜けとなったポアロの姿があった…

File 11 工藤新一登場？

吹き抜けとなったポアロの前には近所の人達や野次馬が集まって来ていた…

時間は8時半、ポアロの営業時間中だ…

無惨な姿となったポアロを見た蘭は言葉を失った…

「梓さん…」

すると、爆発してまだ2分もたたない内にパトカーと消防車が着いた。

パトカーが止まると中からは目暮警部が出てきた…

「あつ、警部殿…やけに早いですね…」

「ああ、署の方に爆弾犯らしき人物から電話が入ったそうだな…」
米花町五丁目喫茶店ポアロを爆破する！』とな…」

「で、でもなんで警部殿が…？」

「いや、私は殺人事件の帰りでたまたま近くにいただけだ…」

「殺人…ですか…？」

ポアロの爆発の火を消そうと消防士達が水をかけていると、パトカーのドアが開き中から見覚えのある顔が出てきた…

「お、お前は！？」

「そう…人間の感情から生まれる憎しみの行為…“Murder”
殺人ですよ…」

「し…新一？」

皆、突然の新一の登場に驚いていた…

それに驚いていてるのはコナンと服部も同じである…

（お、おい工藤…どないなってんねん…）

（い、いや…俺にも何が何だかサッパリ…）

（まさか、お前が偽物とちゃうよな…）

（バーロー、ちげーよ！）

すると新一（偽）は蘭を気にせずコナンと服部の所へ行つた…
すると新一（偽）は小声で言つた。

「よお、探偵ボウズ…」

これを聞きコナンはようやく誰なのかわかり、ニツとした…

「お、おい工藤どないした…？」

「久しぶりじゃねえか…怪盗キッド！」

コナンと新一^{キッド}の会話を見てて蘭は少し悲しそうだった…

「キ、キッド！？工藤の姿してるこいつがキツ…」

「シ、シー！」

声のポリュームの大きい服部をあわててキッドが口を抑えた…

「んで…なんでオメーが来たんだよ…」

「ん？ああ、ちよつとした下調べってとこかな…ところで名探偵…
オメーにこれやるよ、人数分あるしな…」

『豪華客船クルーズう！？』

キッドに渡されたチケットを見てコナンと服部がはもった。

「なんでオメーがこんなもんくれんだよ！」

「ホントは俺が行く予定だったんだけど仕事が入ってまってる」

そう言いながらキッドはウィンクした…

「ハッ、どうせ仕事言つのも盗みなんやろ…」

「まあね…」

「……なあキッド、オメー目暮警部の車に乗ってたんだよね…」

コナンが横から口を挟むように聞いてきた…

「ん？ああ…」

「警部が言つて以外に何か聞いたか？」

「……………」

思い出そうと少し沈黙するキッド…

「そーいえば、『直に回路が…』とか『車が』なんとかか言つてたぜ…」

これを聞いたコナンと服部はお互いに気付き視線があつた…

（なるほど…）

（そついう事か…）

F i l e 1 1 工藤新一登場？（後書き）

今回は自信作です。あらずじも有効活用できたでしょうか？もう夏休みも終わりです。受験生なのにこんなことしてて大丈夫かな？
まっ！頑張りますか

それでは評価お願いします（^人^）

File 12 涙（前書き）

前回のあらすじ>>>突如目の前に現れた新一…、しかしその正体は怪盗キッドであつた。そこでキッドが発した言葉がコナンと服部を答と導いた。だが、その姿を見た蘭の思いは…

File 12 涙

「なるほど…」

「そういう事が…」

二人はキッドの言葉を聞き例の手紙の意味がわかった…

その二人を見ていたキッドはよくわからなかったがなんとなく笑みを浮かべた…

すると、キッドの背後から蘭が声をかけてきた…

「ねえ新一…？」

「ん？」

突然声をかけられビックリしたキッド…

すると次の言葉に三人共驚いた…

「新一…うつん、キッド…」

『えっ！？』

後ろの業火がコナン達三人を紅く照らしていた…

「な、何言ってんだよ…俺は工藤新一…」

「止めて！二度と…こんな事…しないで…！」

（蘭……）

涙を浮かべながら苦しい思いの中で言った…

それを聞いたキッドは三人に背をむけ灯りのない方へ去っていった…

去っていくキッドに気付いた目暮警部は、

「お、おい工藤君…!？」

声をかけると、キッドは左手を軽く挙げて行った…

涙を拭う蘭を見たコナンは自分を責めると同時に奴らの事が浮かんだ…

(ごめんな…蘭、辛い思いさせて…)

《ピリリリ…》

携帯が鳴った…

音の主は目暮警部だった。

画面を見ると『佐藤美和子』と出ていた。

「目暮だ…!」

「目暮警部！爆弾犯らしき男を確保しました！」

「なんだとお！？自首でもしてきたのかね!？」

「いえ、携帯から掛けてきたようで、逆探知する事が出来ました。」

「…そうか、どうやら素人のようだな…」

「それが話を聞くと、何者かに指示されその通りに行動していたと…」

「フム…そうか、わかった！また何かわかったら連絡してくれ…」

《ピッ!》

電話を切りふと横を見ると、服部と肩に乗っているコナンが電話の内容に耳をたてていた…

コナンは服部の肩から降りると気付かれないように、建物の影へと入って行った…

コナンは新一の方の携帯を取り出すと目暮警部にかけた。

《ピリリリリ》

目暮警部は佐藤刑事だと思い画面を見ずに電話に出た。

「何かわかったかね佐藤君！」

「いえ…工藤です。」

「く、工藤君！？どうしたんだね、急に帰ってしまつて…」

「ちよつとわけありで…、それより爆弾犯の次の狙いがわかりました。」

「おお、ホントかね！？それで何処なんだい？」

「高速道路…そう、爆弾犯は日本全ての高速道路を爆破しようとしているんです…！」

「す、全てだと！」

目暮警部はかなり驚いていた、それもそのはずだ…日本全てのをと言うんだから…

「ええ、だから一刻も早く高速道路を封鎖するように指示してください！」

「あ、ああわかった…」

だが、この時警察の抵抗も通じないとは誰も思わなかった…

File 12 涙（後書き）

更新遅れました。夏休みも終わって次は学園祭。中学生最後の学園祭頑張るか…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4041h/>

The End a Case—最後の事件

2010年10月14日21時46分発行